

しも休めないところです。トゥリッドウとの難しい二重唱を終えたと思ったら、彼女だけ舞台上に残り、アルフィオが現れて、また難しく、ドラマティックな二重唱が始まるのですから。

歌手としての道程は、今まで私にたくさん満足感と新しい感動を与えてくれました。遠い国々に旅ができ、そこで、歌い手と共にオペラの魔力を体験したいと集まって下さる皆さんに、私の一部分を捧げることが出来ます。私にはもうすぐ9歳になる娘がいて、家を空けるのは常に簡単なことではありませんが、娘に献身的な夫に助けられています。愛情を欠かさず、家族と過ごせる時間を大切に、一緒にいられない時は毎日電話で話すようにしています。

マッシモ劇場へのデビューは98年のマルコ・トゥテイノの《女狼》の初演で翌年は《エフゲニー・オネーギン》を歌いました。マッシモ劇場とは大変良い関係を保っており、今までに何度も行った日本に、また一緒に行けることを楽しみにしています。日本では《ファルスタツフ》、《リゴレット》、《ウェルティ》《レクイエム》《トロヴァトーレ》《仮面舞踏会》《ドン・カルロ》と、たくさん歌う機会に恵まれましたが、私は日本の聴衆を敬愛しています。オペラを愛して、大切にしてください。私たち歌い手にこれだけの愛情を注いでくれる、温かく忠実な聴衆を、私は世界のどこでも見たことがありません。私たちが力の限りを注ぐ《カヴァレリア・ルステイカーナ》を気に入っていたとき、心の中に何かを残せることを祈っています。

マリアナ・ペンチエーヴァ

Mariana Pencheva ★メゾソプラノ

バレモ・マッシモ劇場の《カヴァレリア・ルステイカーナ》で来日。サントゥツァを歌う

6月に来日するバレモ・マッシモ劇場の《カヴァレリア・ルステイカーナ》でサントゥツァを歌う、現在注目のブルガリア人メゾソプラノ、マリアナ・ペンチエーヴァに話を聞いた。

サントゥツァ・デビューは、1997年ナポリのサン・カルロ劇場でした。

私は、脆さと強さを併せ持つこの役を大変愛しています。特に心を動かされるシーンには、トゥリッドウを永遠に失っただろうと実感した後の、アルフィオとの二重唱です。

この役の難しさは、1度舞台上出たら開放して、少

